

# 一冊の葉

Manyoh

## ゆりあげ港朝市グランドオープンの記念にプロスパーポローニアを寄贈

～名取市の復興と繁栄を願って～

平成25年12月4日は東日本大震災から1000日を迎えました。国連ウィメン日本協会さくら・NPO法人一冊の会（日本レソト王国友好協会・日本タンザニア友好協会）・尾崎行雄記念財団は、震災発生直後から今日まで67回支援物資を直接運び、被災者の皆様にお手渡しをしてきました。最初は、まずは食べ物や水を、続いて日用品やもらって嬉しい物を、と現地の方が「今欲しい物」その時々に合わせてお一人おひとりに配りました。識字から始まった「一冊の会」らしく、震災から20日後には被災遺児への教育支援について市長と打ち合わせ。本や図書券など次々と寄贈してきました。また、未来を担う子ども達の教育支援として教育資金の贈呈、小学校へのプロスパーポローニア（繁栄の桐）の植樹も行いました。これまでに、希望のシンボルとして福島県相馬市磯部小学校と宮城県気仙沼市面瀬小学校に植樹しています。

青天に恵まれた12月1日、宮城県名取市閑上地区で30年前から続いている「ゆりあげ港朝市」がグランドオープンしました。閑上(ゆりあげ)地区は江戸時代以前から漁港として栄えた町で、約30年前から朝市が開かれていました。震災前は、新鮮な海の幸や地場産品の野菜などが並び、多くの人で賑わい、活気に溢れていたそうです。3.11の津波では、海のすぐそばにあった朝市の会場は全てが流されてしまいました。しかし、震災のたった2週間後には、場所を変えて臨時営業を始めたそうです。この朝市の復活は震災後に落ち込んでいた市民を勇気づけました。やっぱり元の場所でゆりあげ港朝市を再建させたい！という思いから、今年5月には会場を元の場所に戻すことになりました。ばらばらになった人たちがまた戻って来られるようにとの願いを込めての移設でした。そして、12月1日にグランドオープンを迎えたのです。

この度のグランドオープンでは、東北学院大学の学生・約30名がボランティアとして協力しています。折しも、12月5日は国際ボランティア・デーです。潘基文（パン・ギムン）国連事務総長は、この日にあたり寄せたメッセージの序文で「社会の変革のために世界各地で活動している若いボランティアに注目します」と述べられました。若い学生はボランティアによって様々な事を学ぶことでしょう。

この重ね重ねの記念にあたり、一冊の会では3本のプロスパーポローニア植樹を決定しました。桐の植樹の時期としては、12月はやや遅いのですが、ゆりあげ港朝市協同組合のますますの繁栄を願い、レソト王国特命全権大使リチャド・モエレツィ閣下、大槻会長と共に寄贈しました。会場にお越しくださった名取市長、佐々木一十郎氏へ、一冊の会が用意したプロスパーポローニアと記念品の額を大使から贈って頂き、一緒にお手植え下さいました。



【植樹の様子】

2本目と3本目は、大使・ゆりあげ港朝市協同組合櫻井広行理事長・大槻会長とグランドオープンに来た地元の人々が共に植樹。リチャド大使はたいへん気さくに地元の方々に声をかけられ、写真撮影にも応じてくださいました。地元の人々にとって、大使との植樹はきっと忘れられない出会いとなったことでしょう。



【名産品の笹かまぼこを片手に】

私たちにも思いがけない出会いがありました。一人の女性が「私は資生堂の化粧品をもらった者です」と小山さんに声をかけて下さいました。以前、仮設住宅で支援物資を配っていた時に会っていた方でした。そして、大使と私たちを朝市の隅々まで案内してくださいました。リチャド大使は、地元の名産を購入され、笹かまぼこを頬張り、お店の方ともハイ・パチリ。仙台城落成の時に踊られたとされる踊りを元にした「すずめ踊り」も鑑賞されました。大使が市民と対話する姿は和やかで、分け隔てない人柄に触れ、私たちも地元の人々も感動致しました。

今回の植樹にあたり、様々な方に協力をいただきました。中でも、現地に居合わせた早稲田大学の学生3人が作業を手伝ってくださいました。先に紹介した東北学院大学の学生を始め、たくさんの若者がボランティアとして携わることに、大きな意味があると私たちは考えます。潘基文（パン・ギムン）国連事務総長のメッセージにあるように私たちも、ボランティアの意義を再確認し、さらに若い仲間へ活動の輪を広げてきたいと思えます。

そして今回、ゆりあげ地区を訪れ、被災者の方と触れ合っただけで感じたことがあります。それは、現地の方々は真剣に前を向いて自分達が今後どう歩いていくかを今必死に模索されているということです。これからどうなるのだろう・・・ではなく、自分達の閉上をどうしたいのか一人ひとりが意見を話し合っただけで考えようと言われていました。以前は、映画館もあって人々がよく集まっていた場所が、今は「危険区域」となり住めなくなりました。人がいなくなればもう「町」ではなくなる、何かしなければ！という焦燥。最寄り駅を降りてから朝市の会場へ向かう道すがら、海へ海へと進む一本道の脇には、住居の基礎枠だけが残された土地が広がっていました。瓦礫は撤去されても、拭えない心の痛み。小学校の屋上に避難した子供達は、屋上で津波の難を逃れながら、多くの人が津波に流されていく様を見ていたそうです。その心の傷はなかなか癒えるものではありません。危険でも、それでもやっぱり懐かしい海の音を聞いていたいと願う方も大勢います。それぞれが色々な思いを抱えるが故に、一足飛びには進まない復興。歯がゆさを感じながらも、自分達の町をなんとかしようと一人ひとりが前を向いている姿をみて、私も身の引き締まる思いがしました。「すずめ踊り」を踊りながら、私も被災者ですよ！と明るく振る舞うご婦人から、勇気をもらいました。「何があっても負けない！勝って生き抜く逞しさ」がびんびんと伝わって、いつまでも心に余韻となって残っています。櫻井理事長の地域を思う一念の強さ、そして長としてのリーダーのあり方を学び、尊敬と共にこの度の大成功を喜びあいたい気持ちで一杯です。

今回植樹したプロスペーポローニアの木が大木となり、生い茂る葉を海風にゆらすとき、その木々の下で復興を果たした閉上の皆さんが憩いのひとときを過ごす日がくる事を願ってやみません。今回植樹した樹々はきっと、プロスペーポローニアの名の如く、閉上の繁栄のシンボルとして被災されたみなさんと共に年輪を刻み、成長していくことでしょう。今回植樹に同行させていただいた私たちも、毎日が勉強、日々前進！の思いです。閉上のみなさんと例え場所は離れていても、共に前を向いて進む心を持って、何事にも挑戦して参ります。

赤田美香子、瀧川紗智子